

先日、読売新聞社が主催する「第47回医療功労者賞」を受賞された、赤名にある和田医院の院長、和田勝祥さん。和田さんは、40年以上にわたって、地域の医療を支えてきました。
今月は、和田さんにスポットをあてて、お話を聞きました。

父親の志を継いで

和田さんは昭和17年、神戸市生まれ。昭和20年に、祖父母が住む大田市に移り住み、(同20年3月、神戸市は大空襲に遭います。)その後、小中学校時代は赤名地区で過ごします。

大学は鳥取大学医学部へ進学し、医師を志します。「父親が医師ということもあって、自然と医師を志した」と。

昭和45年に医学部を卒業し医師になると、大病院の医師などとして経験を積みみます。しかし、医師としての道を順調に歩んでいた昭和50年、飯南町で開業し、医院を営んでいた父親が亡くなります。翌年の4月、

昭和23年に父親が開業した「和田医院」の後を継ぎ、「まち医者」としての一步を踏み出しました。

自ら足を運んで

医院を継いだ当時、多いときには約20軒の往診先があったといいますが、来院することが困難な高齢者の自宅へ、夜間や休日、雪が降り積もる日も、電話があれば自ら車を運転して患者の自宅に向かい、まち医者ならではのフットワークの軽さで、柔軟に対応しました。

「昔は、一刻を争うときは酸素ボンベを持っていくこともあった。そう思えば、今は救急車も

地域の医療を守る

まち医者

検査結果をチェックする和田院長



和田院長と看護師の渡邊光子さん。渡邊さんも昭和53年からこの場所で働いている



大学医学部時代の写真を懐かしく

あるし交通の便も比較的好いので、少しは楽になったかもしれない。書類物は増えたけども。現在は6〜7軒の往診先がある。医院は、月・水・金の週3日、主に午前中が医院での診療で、午後は月曜と金曜が往診。水曜日の午後は事務的なことをしている。グループホームへの往診もしている」

また、昭和51年から平成29年までの間、40年以上にわたって、地元の小中学校の学校医も務めました。児童・生徒、教員の健康管理と保健衛生指導にあたり、平成29年には、学校保健文部科学大臣表彰を受賞。「子どもたちの成長とともに、子どもたちの健康管理に携われたことは、私の大きな財産だね」

まち医者の役割

和田医院は、一次医療機関という位置づけになります。最初

に診て、一刻を争うことや高度な治療が必要であれば、高次の医療機関へ繋ぐ役割を担います。「加えて」と和田さん。「地域密着の医者としての役割が大きいと思っっている。昔から付き合いのある人は特に、最初に電話をかけてくるのは私のところだったりする。地元ではあるし、赤名地区はほとんど顔が分かる。気軽に診てもらえると思っただけではないかと思っ。健康診断後の相談に来られる人もいる。そこに住んでいるからこそ、コミュニケーションがとりやすい。田舎の病院の良いところだと思っ」

まちの医療を最前線で守る

どこに住んでも適切な医療を受けられることは、生涯にわたって安心して暮らせる地域社会を実現するために必要不可欠な条件です。ですが、本町をはじめ、中山間地域の医療従事者の確保は厳しい状況が続いています。

町では、独自の助成制度を設け、医師、看護師等の医療従事者の育成等に取り組んでいます。また、島根県や他の医療機関の協力を得ながら、医療体制を整えています。しかし、根本的

な医療従事者不足の解消には至っていない状況です。「ここで働き始めた頃は、この辺りにも5つの民間病院があったが、今は私だけになってしまった。1月に77歳になったが、昭和51年に和田医院の院長になり、もうすぐ満43年が経つ。私もまだまだ頑張りたいとは思っっているが、いずれは後のことも考えないといけない。この場所ということは難しいかもしれないが、例えば、志々や谷のように出張診療所のような形で、飯南病院と連携して続けていくことが必要だと思っっている」

和田さんは、毎年8月に開催されている、町の医療従事者育成助成制度を活用している学生との交流会「メディアカフェ」に参加しています。「医療従事者を目指す若者たちには、ぜひ、しっかりと経験を積んでもらって、将来、まちのために頑張っほしい。私も、それまで町の人の健康と笑顔のために、微力ながら尽力していきたい」

まちの医療を最も住民に近い場所を守る「まち医者」。その想いを、若者たちに受け継いでいくという使命を、和田さんは先頭に立って引っ張っています。



左端が医学部時代の和田院長